曇始と高句麗佛教

木村宣彰

一

中国佛教が朝鮮へ伝播したのは高句麗・百済・新羅の所謂古代朝鮮三国の鼎立の時代であった。三国の中では中国と直接境域を接する高句麗がまず最初に佛教思想と接触する機会を得てそれを受容した。当時の高句麗の国都は鴨緑江中流域の輯安の地にあり、南は新羅・百済と国境を接し、北は鮮卑族の慕容氏の前燕と本幹山脈を以って対峙し、佟佳江・鴨緑江流域の朝鮮半島北半を支配していた。ところが高句麗の故国原王十二年（三四二）に燕の大軍が鴨緑江流域を攻めて高句麗の都を占領し、王陵を暴き多数の財宝と男女五万余人を捕えて帰り、高句麗に絶大な打撃を与えた。① この事件によって高句麗の西進は停止し、以後、鮮卑の慕容氏の燕をはじめとして胡人の国家に朝貢することとなったのである。その前燕も慕容儁のとき、前秦符堅の攻撃を受けて滅亡し（三七〇年）、前燕慕容氏に代って秦の符堅が華北一帯に覇をとなえることとなった。即ち、前燕に代って前秦が高句麗と直接国境を接することとなったのである。

かくして高句麗へ佛教思想を最初に伝えたのは五胡十六国中の雄国であった前秦の王符堅であったと伝えられている。この高句麗の佛教伝来説についてもっとも明確で、且つ権威ある記録を残しているのは金富軾（一〇七五～一一五一）の三国史記高句麗本紀である。即ち、高句麗本紀は小獸林王即位二年の紀に次のように記しているのである。

二年夏六月、秦王符堅遣使及浮屠順道、送佛像・経文、王遣使廻謝、以貢方物、四年、僧阿道来

五年春二月、始創肖門寺、以置順道、又創伊弗蘭寺、以置阿道、此海東佛法之始②

この高句麗本紀の記載に従えば小獣林王二年（東晋・咸安二年、前秦・建元二年、三七二年）に前秦王符堅が使節及び佛教僧（浮屠）順道を遣して佛像・経典を齎し、次いで二年後の同王四年に何処からとも記されていないが僧・阿道が渡来し、同五年に及び肖門寺・伊弗蘭寺の二箇寺が創建され順道・阿道の両僧がそこに住したと言う。この三国史記記載の所説は、佛教伝来の紀年及びその事蹟に関してはなはだ明解であり、一往疑問を挾む余地は無いようである。

そこで次に三国史記と並んで古代朝鮮三国に関する極めて貴重な史料である高麗の僧一然（一二〇六～一二八二）の撰にかかる三国遺事によって高句麗の佛教伝来説を検討しよう。三国遺事は巻三「順道肇麗」の条に、

高麗本記云、小獣林王即位二年壬申、乃東晋咸安二年、孝武帝即位之年也、前秦符堅遣使及僧順道、送佛像経文、時堅都関中、即長安、又四年甲戌、阿道来自晋、明年乙亥二月、創肖門寺以置順道、又創伊弗蘭寺以置阿道、此高麗佛法之始③

と、高句麗の佛教の初伝に就いて記している。此で三国遺事は、その説を「高麗本記」の説に根拠している旨を述べているが、然らばその「高麗本記」とは何か。それは三国遺事の他の多くの引用例から類推して三国史記の「高句麗本紀」を指すこと間違いない。ただ今の場合、三国遺事所引の「高麗本記」と前掲の三国史記の「高句麗本紀」との相違点は、「高句麗本紀」が「四年、僧阿道来」とのみ記しその出自を明さないが、三国遺事所引の「高麗本記」は「又四年甲戌、阿道来自晋」と阿道が晋より来た旨を記している。三国遺事の撰者一然が一体何を拠り所として「自晋」の二字を補ったかは検討を要するが、今はそれに断定的見解を示すだけの資料を欠くのである。

それと今一つの相違は三国史記の「高句麗本紀」が「此海東佛法之始」と記しているところを、三国遺事所引の「高麗本記」では「海東佛法之始」を改め「高麗佛法之始」と為している。当時の高句麗の領域から勘案して「海東」の二字はもとより馴染まないものではあるが、特に三国遺事に於いて「高麗佛法之始」と称したのには明らかな理由があった。即ちそれは三国遺事が、その興法篇に於いて「順道肇麗」、「難陀闢済」、「阿道基羅」の三条④を設けて高句麗をはじめとして百済、新羅の朝鮮三

国の各々の佛教伝来説を併せ記載したために殊更に海東の両字を高麗に改めざるを得なかったのである。

三国史記、三国遺事によって高句麗佛教の伝来に就いて考察したので、次に併せて高麗の覚訓（〜一二一五〜）の海東高僧伝の説を検討しておくことにする。海東高僧伝はその劈頭に「釈順道」の伝を載せ、そこで高句麗の佛教の伝来の様子を記している。即ち、

句（マヽ）高麗第十七解味留王或云小獸林王二年壬申夏六月、秦符堅発使及浮屠順道、送佛像経文、於是君臣以会遇之礼、奉迎于省門、投誠敬信、感慶流行、尋遣使迴謝、以貢方物、或説、順道従東晋来、（中略）後四年神僧阿道至自魏⑤

と記している。海東高僧伝もまた先の二書と同じく、高句麗の第十七代解味留王すなわち小獸林王の二年夏六月に前秦王符堅が遣した使節及び浮屠僧の順道によって佛像・経文が齎らされたと言う。そこで高句麗の君臣が省門（役所の門のこと）に奉迎し、のち応礼として高句麗の使者が前秦に朝貢したことを記している。ただここで特に注意すべき点は順道及び阿道の出自に関して異説を紹介していることである。すなわち海東高僧伝は「或説」と称し、順道が東晋より来て佛法を伝えたといい、又「存古文」と称して神僧阿道が魏より渡来したことを述べ、従来の説との違いを示している。高句麗へ佛教を伝えたと言う順道・阿道の出自については、海東高僧伝が自ら「始めて佛法を伝えしことなれば、則ち（前）秦も（東）晋も弁ずること莫れ、何れが是にして、何れが非ならんや」と評しているように、実際に文献を渉猟するとき順道の出自について前秦となす説、東晋となす説、魏となす説の三説が存し、阿道についても亦同様に前秦・東晋・魏の三説が存するのである。⑥ところが高句麗の小獸林王代には魏は未だ建国に到らず、順道らが魏から渡来したと為すことは時代的に矛盾する。しかし、その後の高句麗と北魏との極めて密接な交渉を勘案するとき、高句麗への佛教伝来者が魏から渡来したと言う説は一概に否定し去ることが出来ず説得力を有するものである。この様に高句麗の佛教伝来の紀年及び伝来者名が一定であるにもかかわらず佛教伝来者の出自についてのみはなはだ異説が多いと言うことは別の観点からみて非常に興味深い問題を含んでいる。いずれにしても高句麗の佛教伝来に関しては三国史記・三国遺事・海東高僧伝など古代朝鮮三国に関する現存史料の間で、伝来者の出自に就いて相違する以外はその所説は一致する。即ち、それらによれば、

高句麗の第十七代小獣林王の二年、前秦符堅が使節とともに僧の順道を遣し、佛像・経文を齎し、更に二年後に阿道が来て、その翌年に省門寺・伊弗蘭寺が創建されたことを以って高句麗佛教の最初となしている。この佛教伝来説は「佛像」と「経文」と「僧」との所謂佛・法・僧の三宝の具備した完全なる佛教の伝来であった。しかも中国佛教史上で釈道安や鳩摩羅什らとの交渉で知られた名代の佛教外護の帝王である前秦の符堅によって伝えられたことによりこれが公式の国家間の佛教伝来と為されているのである。

この佛教伝来説は今日国の内外で広く認められほぼ定説として知られているようである。李能和氏の「朝鮮佛教通史」をはじめとして現在に至るまでの朝鮮佛教に関する諸論攷はいずれも前述の小獣林王二年の順道による佛教将来説を遵守している。ところが、今日通説となっているこの高句麗の佛教伝来説はいずれも金富軾の三国史記高句麗本紀に根拠しているのである。右の三国遺事や海東高僧伝、さらに東国通鑑など朝鮮の史書も亦等しく小獣林王二年の佛教伝来説を記載しているのである。これら文献の語るところもその源流は三国史記の高句麗本紀に存するのである。しかしここで一見奇妙に思うのは、四世紀の高句麗佛教に就いて語る根本資料が、実は十二世紀に成立した三国史記であると云う点である。このことは十分な検討を必要とするであろう。そこで筆者は先に三国史記の高句麗本紀の原典批判を試み、その佛教伝来説に再検討を為して佛教史学会に於いて「高句麗佛教伝来説考」と題して卑見を発表した。要するに小獣林王二年の前秦符堅の遣した順道による佛教伝来説は、実に十二世紀に到り高麗仁宗の命に従って高句麗・百済・新羅の歴史を所謂正史の形式に倣い紀伝体の史書にまとめた三国史記を編纂する際に、その編者によって、中国側の文献を借りて事実に非ざるものを事実の如く仮作したもので史実としての可信性の乏しいものであることを論証した。紙数の都合で此でその論旨を再述することは出来ないが、従来の通説であった順道の佛教伝来説を捏造譚としてその史実性を否定した筆者としては順道に代る実の佛教伝来者を明らかにしなくてはならない。然らば三国の歴史に関して現存最古の文献である三国史記以外に別に高句麗の佛教伝来について語る資料は存しないのであろうか。かかる観点から三国史記に先行する資料を渉猟して先に述べた順道・阿道に代る真の佛教初伝者を明らかにしようとするのがこの小論の目的である。

二

新羅末の文士・学者として知られる崔致遠[7](八五八～?)は精敏・好学で歳十二にして唐咸通九年(八六八)渡唐留学し、唐僖宗乾封元年(八七四)登科、ついに宣州漂水懸尉を授りのち承務郎侍御史内供奉に陞ったと伝えられている。彼は唐に於いて学徳を以ってその令名を天下に馳せ、中和五年即ち新羅憲康王十一年(八八五)に唐の使節(淮南入新羅兼送国信詔書等使)として故国新羅に還り、そのまま新羅王朝に任え、翰林学士となり、のち兵部侍郎、大山郡太守などを歴任したが、時は羅末の戦乱でその学殖を十分発揮することが出来ず、乱を避け伽耶山海印寺にかくれるに至ったのである。彼の著述としては「唐大薦福寺故寺主翻経大徳法蔵和尚伝」[8]が殊の外有名であるが、実は崔致遠の名を大いに高からしめたのは唐人に非ずして唐書芸文志[9]にその名を列せられた「桂苑筆耕」二十巻であった。

ところがここに崔致遠の撰になる極めて注目すべき碑文が存する。即ち朝鮮金石総覧等に収められる「鳳巖寺智証大師寂照塔碑」である。この碑文については既に大東金石書に、

鳳巖碑、在聞慶曦陽山鳳岩寺智証禅師碑、釈慧江八十一書、崔致遠文、梁均王龍徳四年甲申立、新羅景明王八年、高麗太祖八年[10]

とある。竪碑の歳次については碑陰に「龍徳四年歳次甲申六月日竟建」と記されているのによるものである。龍徳は後梁の末帝の年号で、二年で改元されたが、その四年は後唐荘宗同光二年に相当する。即ち新羅の景明王八年(九二四)である。

この崔致遠の「鳳巖碑」には仏教の伝来に関する非常に重要な記載が認められるのである。この碑に記載するところは、その撰者から言っても、その建碑の歳次から言っても当該課題に関する研究の上で決して看過することの出来ない貴重な資料である。しかも先の三国史記よりははるかに古い資料である。ところが従来は、高句麗等古代朝鮮三国の問題を考察するとき、専ら三国史記や三国遺事など十二・三世紀に成立した文献資料に拠って検討され、それらに先行するところの資料であるこの碑文にまで言及されることはほとんどなかったのである。

然らば崔致遠は高句麗の仏教伝来についてどのように述べているのであろうか。崔致遠の「鳳巖碑」に云く。

昔当東表鼎峙之秋、有百済蘇塗之儀、若甘泉金人祀、

厥後西晋曇始始之貊、如葉騰東入、句驪阿度度于我、如康会南行[11]

これは明らかに百済・高句麗及び新羅の佛教伝来を中国佛教史と対照しながら論じたものである。ここに言う百済の「蘇塗之儀」とは実体が明瞭ではないが、恐らくは三国志三十魏書・東夷伝の韓伝に「立蘇塗、其義有似浮屠、而所行善悪有異[12]」とあり、又范曄の後漢書八十五東夷列伝の韓伝にも「又立蘇塗、建大木以懸鈴鼓、事鬼神[13]」と記されているのと同じものを指すのであろう。後漢書の注によれば「魏志曰、諸国各有別邑、為蘇塗、諸亡逃至其中、皆不還之、蘇塗之義、有似浮屠」と説明している。これらによれば「蘇塗之儀」とは佛塔の如きものとも解されるし、或いは寺院の如き一種の「聖域」の様にも解される。又「貊[14]」とは貊国漢水東北と称されるように遼東及び高句麗を包む地域を指すが、ここでは百済及び新羅とともに記されているのであり、古代朝鮮三国中の高句麗を指すこと明らかである。又「西晋曇始」とあるのは、司馬炎の西晋（二六五～三一六）を指すものではなく、此では「葉騰東入」と対を為すもので西方の東晋の曇始の謂である。

よって崔致遠の碑文に説くところはおおよそ次の如くであろう。即ち、昔、朝鮮三国が鼎立して存したとき、百済で蘇塗之儀（佛塔の如きものを建立するのを指す）を行なっていたのは、あたかも中国で金人（浮屠）を甘泉宮に祀ったようなものである。その後、西の（東）晋の曇始が始めて（佛教を伝えるため）貊（高句麗）に之ったのは、あたかも（西の天竺の）迦葉摩騰が東の中国に入り（佛教を伝えた）のと同じである。また高句麗の阿度が南の我が新羅に来て（佛教を伝え）衆生を教化したのは、中国に於いて江南へ始めて佛教を伝えた康僧会の如くである、と。要するに崔致遠は朝鮮三国の佛教伝来を論ずるのに中国の佛教の歴史と対応させているのである。そこで今、この崔致遠の説に従えば、高句麗にはじめて佛教を伝えたのは三国史記等に言う前秦の順道や阿道ではなくして、東晋の曇始であると明言しているのである。

三

高句麗の佛教伝来説に関する従来の通説は、金富軾の三国史記高句麗本紀所載の前秦符堅の使者及び僧順道による小獣林王二年佛教伝来説が強く支持されている。三国史記の佛教伝来説を仮作となした筆者としては、三国史記以前の現存資料によって考察する限り、高句麗への

佛教伝来者は順道らではなく崔致遠の指摘するように東晋の曇始であると考える。前秦順道佛教将来説は現存の朝鮮史書の等しく説くところではあるが、実は十二世紀に至って突如出現した三国史記の説に根拠するものでそれ以前に溯ることは不可能であり、しかも中国側の資料によってそれを傍証することも出来ない。之に対して崔致遠の説く東晋曇始の佛教伝来説は三国史記よりもはるかに古い説であるばかりでなく、中国側の文献資料によって傍証されるものであり、史実として十分に可信性を有するものと考えられる。

崔致遠の言う様に東晋の曇始がはじめて高句麗に佛法を伝えたと言う説は、実は中国の文献を渉猟するとき屢々見られるのである。先ず、梁慧皎の高僧伝巻十、神異篇に曇始の伝を載せて云く、

釈曇始、関中人、自出家以後多有異迹、晋孝武大元(ママ)之末、齎経律数十部往遼東宣化、頭授三乗立以帰戒、蓋高句麗聞道之始也[15]

ここで慧皎は東晋孝武帝の太元（三七六～三九八）の末年、曇始が遼東へ往き経律数十部を齎し教化し、三帰依五戒を授けたことを以って「高句麗聞道之始也」と称しているのである。しかもこの曇始が太元の末に関中を出て遼東に赴きそのまま行方知れずと言う訳でなく、彼は東晋の義熙年間（四〇五～四一八）に再び高句麗から関中に還り長安近くの扶風・京兆・馮翊の三輔に開導したと伝えられている点より推して八、九年に亙る高句麗宣化ののち帰郷しているのであり、高僧伝の撰者、慧皎にとっても何らかの明確な証拠を有した上での立言であったと考えられる。高僧伝は右の文に引き続き、

義熙初復還関中開導三輔、始足白於面、雖跣渉泥水未嘗沾涅、天下咸称白足和上[15]

と曇始の関中帰還を記している。曇始は神異を以って天下に知られ、晋末、匈奴の赫連勃々が関中を襲い僧尼に迫害を与えた際にも、

時(曇)始亦遇害、而刀不能傷、勃勃嗟之、普赦沙門、悉皆不殺[15]

と、その神異が讃えられているのである。更に高僧伝巻十、釈保誌伝[16]にも白足禅師曇始について「白足臨刃不傷、遺法為之更始」と伝えている。又、北魏太武帝（拓跋燾）が崔浩の上奉を容れて長安の沙門を抗殺し、寺塔を毀損した所謂北魏の破佛に際しても斬れど傷つかず、虎をしむけても虎が近づかず、彼の神異を見た燾が佛教の神通を黄老の及ぶところに非ざると知り、曇始の上殿を許し

足下に頂礼しその曾失を悔いたという。そこで高僧伝には「始為説法明弁因果、燾大生愧懼」と述べている。曇始は太武帝の為に説法し因果の道理を明かし燾が愧懼を生じたと言うのはまさに彼の高句麗に於ける佛教宣化の様子を髣髴させるものがある。尚、太武帝の廻心開悟が白足禅師（曇始）の啓発によることは道宣の続高僧伝巻一曇曜伝[17]にも記録されている。

中国に於いても佛教伝来の初期には、佛図澄らの神異にすぐれた僧が活躍したように、恐らく曇始も亦高句麗伝道に際しては神異の力を遺憾なく発揮したことであろう。曇始が拓跋燾のために因果の報応の違わざることを説き、燾をして愧懼を生ぜしめ佛教に帰せしめたと言うが、彼は高句麗往化に於いても三界因果の教えを明かし、三帰五戒を教えて佛道に帰せしめたのであろう。慧皎が曇始の高句麗に於ける教化を称して「顕授三乗立以帰戒」と述べているのはこの様な状況を物語るものと想像される。

関中の白足和尚曇始が東晋の太元の末年（三九六）に経律数十部を持って遼東に往化し三乗を顕授し立つるに帰戒を以ってしたと言う事実を以って「高句麗聞道之始」となす慧皎の高僧伝の説は、先に述べた崔致遠の説に符合するばかりでなく、唐の神請の北山録も亦同じように曇始高句麗教化のことを記録している。北山録巻三に云く。

晋曇始、孝武末（東晋也、帝臨位深奉佛法符堅兵至謝玄破也）適遼東、高麗開導始也、後還三輔（三輔咸陽県昔秦皇於此置殿観）三輔人宗仰之[18]

東晋の孝武帝（三七二～三九六）は太元二十一年九月に崩じ降安に改元されたので曇始の高句麗開導が太元末であると言うから太元二十年頃のこととなる。また、曇始がはじめて経律など佛典を高句麗にもたらし佛教を伝えたと言うことは法苑珠林巻三十一などにも認められる。さらに中国の諸文献を渉猟すればこの外にも曇始高句麗往化の記事を見い出すことが出来るであろう。

ところでこの曇始の高句麗往化の説は、朝鮮側資料としては崔致遠の鳳巌碑のみの説であるかと言えば決してそうではない。古代朝鮮三国の正史とも言うべき三国史記は曇始について全く触れていないが、実は三国遺事の撰者一然は既に曇始のことを知っていたのである。即ち、三国遺事巻三に新羅佛教に就いて論じた「阿道基羅」の条に次の如く述べている。

又按元魏釈曇始（一云惠始）伝云、始関中人、自出家已後、多有異迹、晋孝武大元年末、齎経律数十部、往遼東

宣化、現授三乗立以帰戒、蓋高麗聞道之始也[19]

この三国遺事の文は先の慧皎の高僧伝の文ときわめて類似するが、ここに言う「伝云」とは高僧伝のことではなくて、他の引用例から推して覚訓の海東高僧伝を指すものである。三国遺事は海東高僧伝によって曇始の存在を知ったのであるが、高句麗の佛教伝来者については飽くまでも三国史記の所説を継承し遵守している。よって三国史記の言う順道・阿道説と海東高僧伝に記している曇始説（海東高僧伝の著者覚訓も三国遺事の撰者一然もともに崔致遠の鳳厳碑の説を知らなかったようである）との相違・矛盾に関し批判検討し次の様に会通している。即ち、

議曰、曇始以大元末到海東、義熙初還関中、則留此十余年、何東史無文、始既恢詭不測之人、而与阿道・墨胡・難陀、年事相同、三人中疑一必其変諱也[20]

結局、三国遺事の著者一然は曇始の存在を知りながらも「東史」（海東の史書）の中に見られないとして曇始説を否定する。すなわち、太元末年（三九六）に渡来し、義熙初年（四〇五）に関中長安に還った曇始は、約十年間この地に留ったことになるが、彼について海東の史書に全くその記録が存しないのは如何と疑い、結局は「東史」である三国史記に記載する順道・阿道説を採用するのである。そこで一然は、曇始がもともと怪奇で知られ計り知れない人物であり、阿道、墨胡子、難陀とその年代及び事蹟が類似するから三人の中の一人の変諱（名）であると考えたのである。

三国遺事の撰者は曇始に関して記した梁高僧伝や崔致遠の碑文等は実際には知らず、海東高僧伝を通してのみ曇始の存在を知ったのである。その為、一然は曇始を以って百済に佛教を伝えたと言う胡僧・摩羅難陀や新羅へ佛教を伝えたと言う沙門墨胡子或いは順道に次いで高句麗へ来たと言う阿道の中の一人に比定せざるを得なかったのである。すでに一然の時代には新羅の大学者崔致遠の説すら忘れ去られ、専ら三国史記の説がいわば正史として権威を有し広く流布していたようである。

然らば三国遺事の拠り所となった海東高僧伝は曇始の高句麗往化に就いて如何なる見解を有しているのであろうか。海東高僧伝の著者覚訓は慧皎の高僧伝によって曇始のことを承知していたのであるが、曇始をもって「高句麗開導之始」と為すものではなかった。海東高僧伝は曇始について次の如く記している。

釈曇始・関中人也、自出家多有異跡、足白於面、雖渉泥水、未嘗沾湿、天下咸称白足和尚、以晋大元末（ママ）

年賚持経律数十部、往化遼東、乗機宣化、顕授三乗、立以帰戒、梁僧伝以此為高句麗開法之始、時当開土王五年・新羅奈勿王四十一年・百済阿莘王五年、而秦符堅送経像後二十五年也、是後四年、法顕西入天竺、又二年羅什生来、玄高法師生焉、晋義熙初、師復還関中、唱道三輔、長安人王胡之叔父某死已数年矣[21]

曇始のことを疑問視する三国遺事とは異り、海東高僧伝は曇始の高句麗への渡来を一往認めた上で、それを秦符堅が佛像・経文等を送って来てより二十五年後のことと為し、最初の佛教伝来者順道・阿道に次ぐものとして位置付けている。これは三国史記の説く高句麗の佛教伝来説が厳然とし権威あるものとして世に広く流布していたことによるものであり、単に伝承されている順道・阿道説と曇始説とを年代の順次に従って並記するにすぎないのである。

以上の考察によって高句麗へ最初に佛教を伝えたのは、文献資料の上から歴史的事実として可信性を有すのは前秦の順道らではなくて東晋の曇始であると断言出来る。即ち、前秦の順道の説は中国側文献には全く認められないし、朝鮮側資料に於いても十二世紀以前にかかる説は全く見られないのである。順道説は十二世紀に至って王命によって〝国史〟として三国史記を編纂する際に一種の事物起源説話として仮作されたものである。これに対して東晋曇始を以って高句麗への最初の佛教伝来者であると為す説は、朝鮮側の資料として三国史記よりもはるかに古い九世紀の崔致遠の碑文に明されており、而も中国側の文献によっても十分に証明されるところである。

しかし佛教伝来の実相は、独り東晋曇始によってのみ為されたものではなく長期間に亙る中国との交渉の間にすこしずつ民衆の中に浸透していったもののようである。現に曇始の高句麗往化より以前にすでに高句麗と中国佛教界との接触を示す事実がある。梁高僧伝巻四[22]の竺潛(法深)伝に支道林(三一四〜三六六)の「与高麗道人書」が引かれている。支道林の高麗道人に与えた書の内容は、上座の竺潛(二八五〜三七四)の徳を讃えるものであるが、かかる書の存在が一体何を物語るものであろうか。支道林は太和元年(三六六)四月、五十三歳で卒しているから、彼が高麗道人に書を与えた時期はそれ以前であり、実に曇始の渡来より三十余年、順道が高句麗に来たと言う小獣林王二年より更に六年も以前のことであった。既に曇始渡来より先に高句麗は中国の佛教と多少の関りを有していたのである。

ところでこの高麗道人が一体何人であるかははなはだ興味深い課題である。覚訓の海東高僧伝[23]は、この高麗道人について「釈亡名」の一科を立てているが、その為人やその事蹟については残念ながら未だ明瞭とは言えない。ただ海東高僧伝は、

遁公中朝重望、其所与寄声交好、必宏材巨擘、而況外国之士、非其勝人、寧有若斯之報耶、旦佛教既従晋行乎海東、則宋斉之間、応有豪傑之輩与時則奮、而無載籍、悲夫[24]

と述べている。遁公即ち支道林は中国で重んぜられその交友は宏材・巨擘の名士であった。況んや外国の士であればその名は亡んでも勝れた人でなければどうしてこのような（支道林が亡名の高麗道人に与えた）書が有ろうか、と高麗道人のことを讃えている。尚、三国遺事は、この海東高僧伝「釈亡名」の記載を誤解し、同巻三興法篇に「（順）道公之次、亦有法深・義淵・曇蔵之流、相継而興教、然古伝無文、今亦不敢編次、詳見僧伝[25]」と述べ「亡名」の高麗道人を法深に比定している。ところが法深とは支道林が高麗道人に与えた書中でその徳を歎じた竺潛即ち竺法深のことであり、亡名の高麗道人を法深となすのは三国遺事の撰者の杜撰である。われわれは三国遺事の記事に接するとき一々その原典批判が必要となるのである。

四

古代朝鮮三国の中高句麗は直接に北中国と境域を接していた為に中国の異質の思想文化に触れる機会が比較的早く且つ多かった。中国の思想文化である佛教は前秦の符堅によって遣された順道らによって齎されたとする説は従来学界で認められ定説となっていた。ところがこの説は十二、三世紀に成立した三国史記や三国遺事の説を単に継承するにすぎないのであり、実には崔致遠が既に指摘しているように東晋の曇始こそが高句麗への佛教伝来の最初であった。しかも高句麗とは地理的に遠く離れ、交流の少なかった中国江南で編まれた慧皎の高僧伝が、殊更に「高麗開導之始也」と述べ曇始の高句麗往化のことを記しているのは必ずや何らかの証拠が存しての記述であったと考えられるのである。

（文部省科学研究費一般研究Dによる研究成果の一部）

註

① 『三国史記』巻十八、高句麗本紀六、故国原王十二年紀（朝鮮史学会編『三国史記』一八三頁参照）および『晋書』

百九載記第九慕容皝、『魏書』巻一百列伝第八十八高句麗、『資治通鑑』巻九十七晋紀十九など参照。

② 『三国史記』巻十八、高句麗本紀六、小獸林王二年紀（朝鮮史学会編『三国史記』一八五頁）

③ 『三国遺事』巻三、興法第三「順道肇麗」（大正四九・九八六・a）

④ 『三国遺事』巻三、興法第三（大正四九・九八六ab）

⑤ 『海東高僧伝』巻一（大正五〇・一〇一六a）

⑥ 順道の出自に関する異説
前秦説　三国史記、海東高僧伝、三国遺事
東晋説　海東高僧伝所引「或説」
魏　説　三国遺事所引「僧伝」
阿道の出自に関する異説
前秦説　三国遺事
東晋説　三国遺事所引「高麗本記」
魏　説　海東高僧伝、三国遺事所引「僧伝」

⑦ 崔致遠については『三国史記』巻四十六　列伝六（前記『三国史記』四六四頁）および今西龍『新羅史研究』所載「新羅崔致遠伝」など参照。

⑧ 高麗義天の『諸宗教蔵総録』には「浮石尊者伝」一巻とともに「賢首伝」一巻とある。跋によれば天復四年甲子（九〇四）彼の五十歳前後に伽耶山海印寺華厳院に於いて撰述したもの。大正蔵第五十巻所収。

⑨ 『唐書』巻六十芸文志に「崔致遠四六一巻　又桂苑筆耕二十巻　高麗人賓貢及第高駢淮南従事」とある。

⑩ 鳳巌寺智証大師寂照塔碑については葛城末治『朝鮮金石攷』（二六三頁）参照。

⑪ 『朝鮮金石総覧』上巻（八九頁）参照。『金石総覧』の欠字部分は李能和氏の『朝鮮佛教通史上中篇』によって補う。

⑫ 三国志巻三十。

⑬ 後漢書巻八十五。

⑭ 例えば山海経に「貊国漢水東北」と云う。

⑮ 慧皎『高僧伝』巻十（大正五〇・三九二b）

⑯ 同右（大正五〇・三九五a）

⑰ 道宣『続高僧伝』巻一（大正五〇・四二八a）

⑱ 唐神請『北山録』巻三（大正五二・五八九c～五九〇a）

⑲ 『三国遺事』巻三（大正四九・九八七a）

⑳ 同右。

㉑ 覚訓『海東高僧伝』巻一（大正五〇・一〇一六c～一〇一七a）

㉒ 慧皎『高僧伝』巻四（大正五〇・三四八a）

㉓ 覚訓『海東高僧伝』巻一（大正五〇・一〇一六a）

㉔ 同右（大正五〇・一〇一六ab）

㉕ 一然『三国遺事』巻三（大正四九・九八六a）